

プロジェクト発足にあたって

伊野義博（新潟大学）

本プロジェクトチームの発足にあたって、その一員として、コロナウイルス感染症の音楽教育への影響と対策、未来への展望等について一言述べます。

1 音楽教育界への衝撃

新型コロナウイルス感染症の音楽教育への影響は、歴史的にみても大きな出来事となって記憶されることと思います。

昨年度末には、小中高、特別支援学校に対して、政府より一斉休業の要請があり、多くの学校では、卒業式や入学式の中止、変更等を余儀なくされました。また、文部科学省からは、3月24日付で、全国の学校に対して「換気の悪い密閉空間にしないための換気の徹底」「多くの人が手の届く距離に集まらないための配慮」「近距離での会話や大声での発声をできるだけ控えること」そしてこれらの条件が「同時に重なることを徹底的に回避する対策が不可欠」であるといった通知がなされています（「令和2年度における小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校における教育活動の再開等について（通知）」）。加えて、3月26日付で東京都の示した新学期ガイドラインでは、「近距離での会話をなるべく避ける」「年間授業計画を見直し、指導の順序等を変更する等の工夫」が求められ、音楽の授業では「歌唱の活動や管楽器（リコーダー等）を用いる活動は行わない」といったことが示されました。類似の指示や考え方が全国に共有され、こうした条件をクリアした音楽授業はどのようにしたら良いのかといったことが喫緊の課題となりました。

その後、改正新型インフルエンザ等対策特別措置法に基づき緊急事態宣言が出され、感染予防のために、小中学校等の臨時休業が要請されました。文部科学省の調査では、4月22日時点で、全国の国公私立学校の91%が「休校している」と回答しています。子供たちは、新しい友達に会うこともできず、自宅待機、自宅学習を余儀なくされ、一方、学校側は、課題の作成に忙殺されました。音楽科の自宅学習はどのようにしたら良いのか、といった問題も浮き彫りされました。

その後、ウイルスの蔓延は落ち着きをみせ、政府は、5月25日に緊急事態宣言を全面解除しています。しかし、新型コロナウイルスとの闘いは「100メートルダッシュじゃなくて長いマラソンと同じ」（京都大学山中伸弥教授の指摘、4月25日新潟日報）と言われており、これまでと全く同じような音楽活動、音楽授業が戻ってくるとは考えにくく、私達には、持続可能な音楽教育はどのようにあるべきか、といったテーマが鋭く突き付けられています。

2 問われていること～コロナ後を見据える～

こうした中で、現在、以下の点が問われていると思います。

- ① 密閉、密集、密接の3条件の重なりを回避する安全な音楽活動、音楽授業をどのように考え、どのように実施すればよいのか、そのための活動や具体的なプランは何か。
- ② 学校に登校できない場合の音楽活動、音楽学習をどのように保障し、具体的に実践していくか。
- ③ 音楽発表会や合唱コンクール、卒業式などの学校行事、部活動や地域交流といった音楽活動は、どのようにすれば良いか。加えて年間計画の見直しは、どのように考え、実施すべきか。

これらに加え、大学等における専門教育、一般社会における音楽活動や音楽教育をどのように行うのか、といったことも重要な課題となっています。こうした点について、より多くの方からたくさんの情報を寄せていただき、解決に向けた発想を共有することが期待されます。

しかし、おそらく真に問われるのは、こうした課題を考えることを通して、音楽をすること、教えること、が再吟味され、これまでの音楽授業を捉え直すとともに、未来につながる音楽教育のあり方を展望するといった前向きな思考法と方法論を獲得することだと思います。

事態は深刻ですが、この際重要なのは、新たな条件下で楽しく意味のある音楽教育を創造するチャンスと捉えることも必要ではないでしょうか。例えば、コロナ禍の下で生み出される音楽活動のアイデアや ICT の活用、あるいはサウンドスケープなどからは、多くの発想を得ることができると思います。

三密回避の授業や自宅学習の課題を考えることにより、これまで当たり前になっていた活動や考え方を問い直し、本来的に必要なモノやコトを浮かび上がらせていく。また、音楽教育の歴史と課題を見直しつつ、音楽教育学の成果を取り込んでいく。これらの作業を通して、コロナ後を見据えた音楽教育を展望する。このような、視線を未来に向けた行動が求められているのではないのでしょうか。

この意味において、本学会が果たす役割は、きわめて重要だと考えます。今回の取り組みがそのための一助となるべく、努力したいと思っています。

2020年5月27日